宮城の地域資源探訪

仙　台　城　跡

●概要

仙台城跡は、仙台藩62万石の藩主（伊達氏）の居城跡で、仙台市の中心市街地西方を流れる広瀬川右岸に位置する青葉山丘陵とその麓にあり、丘陵の突端に本丸、その北側山麓の河岸段丘には二の丸、さらに下がった東側に三の丸（東丸）が形成されています。

1600（慶長5）年、初代仙台藩主政宗によって城の縄張りが開始され、本丸の地は、中世に当地を支配していた国分氏の城（千代城）跡で、東側は広瀬川を臨む高さ60㍍超の断崖、西側は御裏林（おうらばやし）と呼ばれた区域と奥深い山林、南側には竜ノ口渓谷という天然の要害が巧みに利用されていました。東西約245㍍、南北約267㍍の城郭は、諸大名の城郭の中でも最大級といわれています。

仙台城は、築城後、火災や地震などによって何度も建物や石垣などを失いましたがその都度再建され、明治政府の管理下に移るまでの約270年の間、一度も攻撃を受けることなく維持されました。そして、廃城後は主に軍隊によって使用され、開発が抑制されたことから、城跡には当時の地形や緑などが色濃く残されています。

【　コ　ラ　ム　】

～地名の由来（千代から仙台へ）～

伊達政宗は、新城の名称（表記）を千代城から仙臺（仙台）城と改めました。仙臺の文字は、中国の唐時代の漢詩「同題仙遊観」の起句「仙臺初見五城桜（せんだいはじめてみるごじょうろう）」に由来すると言われ、城下町も仙臺と呼ばれるようになりました。

地名の由来については、①かつて城の付近に千体仏（せんたいぶつ）を祀った寺があったことから千体（せんたい）の地名が付き、転じて千代（せんだい）となった。②城のある場所の地名（現在の青葉区川内（かわうち）地区）を川内（せんだい）と音読した。③アイヌ語の「セプ・ナイ（広い・川）」が語源で、広瀬川に由来する…など諸説がありますが、①の千代説が有力と考えられています。現在、千代の表記は、国道4号線仙台バイパスの広瀬川に架かる千代（せんだい）大橋や仙台名産の商品名などに使用されています。

●明治以降の仙台城

明治政府の管理となった仙台城は、本丸の建物群が取り壊され、仙台鎮台の施設として使用されていた二の丸の建物等は1882（明治15）年、火災によりその殆どが失われました。残された仙台城の顔とも言うべき大手門は、桃山建築の特徴を生かした豪壮な建物として知られ、1931（昭和6）年には脇櫓（わきやぐら）（隅櫓（すみやぐら））とともに国宝に指定されましたが、1945（同20）年の仙台空襲で巽門などとともに焼失しました。これにより、仙台城は諸建築がすべて失われ、石垣と御裏林の林相を残すだけの文字通り城跡になりました。一方、本丸跡には1904（明治37）年、招魂社（現在の宮城縣護国神社）が建てられ、戦没者を祀る場所として市民に開放されました。また、1925（大正14）年には、仙台市が大手門などの地域約1㌶を軍から借り受けて公園とし、大手門から本丸跡へのルートが開放されました。

※現在の知事公館正門（青葉区広瀬町：県指定有形文化財）は、大手門から本丸に至る途中にあった中門が大正年間に移築されたものと伝えられ、仙台城の数少ない遺構としてその面影を今に伝えています。

仙台城本丸跡

写真提供：仙台市観光交流課

●城跡の活用（文教地区へ）

仙台城跡は、戦後、米軍の住宅地（キャンプ仙台）として使用されていましたが、返還後は東北大学のキャンパスや仙台市の青葉山公園など、公用・公共用施設の用地などに順次転用されました。

1958（昭和33）年以降、二の丸跡では東北大学の川内キャンパス（文学、教育学、法学、経済学の文系4学部）および会館、図書館などの整備が進められ、かつて御裏林と呼ばれた一帯は付属植物園になりました。一方、戦災や接収などにより機能が殆ど停止していた公園は1946（同21）年、戦災復興院告示によって都市計画が決定され、1953（同28）年に都市公園（青葉山公園）として開園しました。その後、本丸跡の一部や三の丸跡などにも整備区域を広げ、1961（同36）年の仙台市博物館の建設（三の丸跡）や1965（同40）年の大手門脇櫓の復元等の整備が進められました。現在の公園区域は、仙台国際センターやテニスコートなどを含め約41㌶となっています。

【コラム】

～東北大学植物園～

かつて御裏林と呼ばれた一帯は、江戸時代から伐採や立ち入りが厳しく管理されていました。数百年にわたり人の手が殆ど入らなかったことから、植物群が自然の力で世代交代を行っていることに加え、森林としてのモミの北限地、シラカシやタブノキ、モチノキなどの集団分布の北限であるなど、学術的な重要性もあり、米軍から返還後は東北大学が管理することとされました。

東北大学植物園は、1958(昭和33)年に理学部付属青葉山植物園として開園し、翌年から一般公開されました。1972（同47）年には、大都市近郊に残存する自然林としては植物の分布上も貴重であると評価され、青葉山の約39㌶が天然記念物に指定されました。2003（平成15）年には、仙台城跡の一部として国指定史跡にもなっています。

※仙台市博物館には、戦後、伊達家から寄贈された慶長遣欧使節関係資料（国宝）や黒漆五枚胴具足等（重要文化財）、奥州仙台領絵図（県指定文化財）など、歴史的価値のある品々が収蔵・展示されています。また、三の丸の堀だった五色沼は、日本のフィギュアスケート発祥の地として知られています。

●石垣の修復と史跡指定

仙台城跡では、仙台開府400年の記念事業として、崩壊の危険性が増してきた本丸跡北側の石垣修復工事が1997（平成9）年から行われました。修復に先立つ発掘調査の結果、現存する石垣の内側に大規模な階段状石列や古い石垣、さらにその内側には築城期の緩傾斜の石垣が確認され、この石垣は3期にわたって変遷していることが明らかになりました。また、本丸跡からは石敷き遺構や大広間の礎石跡、巽櫓跡などが確認され、金箔瓦やヨーロッパ製のガラス器、寛文年間の朱書きのある石材や慶長12年の墨書のある木簡などが出土しています。このような発掘調査の結果や残された史料などから当時の様子が明らかになりつつあり、遺構の保存状態が良好なことから、仙台城跡は我が国の近世を代表する城跡として評価され2003年（平成15）、国の史跡に指定（部分指定）されました。これを受けて仙台城跡整備基本計画が策定され、保存整備のための施策が進められています。

更に周辺では、市営地下鉄（東西線）の建設が平成27年度の開業に向けて進められています。また、計画面積を約50.3㌶に拡張した青葉山公園の整備のほか、東北大学青葉山新キャンパスでは、次世代自動車の実証実験拠点等としての活用が予定されるなど、都市機能の整備が進められています。

仙台城跡は、年間を通じて多くの観光客等が訪れ、宮城県・仙台市を代表する観光スポットとして親しまれている貴重な地域資源です。そして、周辺の川内・青葉山地区を含めた文教地区は学都仙台の中核ともなっており、新たなインフラ等の整備によって、さらに地域の賑わいに貢献することが期待されます。

仙台城跡の全景：白線の内側が国史跡指定範囲

写真提供：仙台市教育委員会

（参考資料）

・仙台市史(近世1)　・角川日本地名大辞典

・文化庁HP　・宮城県HP　・仙台市HP　ほか